

ネイチャー・センス展：吉岡徳仁、篠田太郎、栗林 隆

日本の自然知覚力を再考する

2010年7月24日〔土〕 - 11月7日〔日〕 森美術館（六本木ヒルズ森タワー 53階）

「日本を再定義する」を2010年のテーマに据えた森美術館は、2010年7月24日〔土〕から11月7日〔日〕まで、「ネイチャー・センス展：吉岡徳仁、篠田太郎、栗林 隆」を開催します。

日本の文化や芸術と自然はつねに近い関係にありました。もともと日本でいう「自然」とは、19世紀末に「NATURE」の訳語として使われたものであり、本来は、森羅万象、天地万物など人間を含むすべての創造物を意味していました。その自然観は、宇宙の神秘や自然現象、四季の変化などを体感的、感覚的に捉え、またアニミズム的な宗教観とも融合して独自の文化や芸術を育んできたといえるでしょう。伝統的な絵画だけでなく、建築、造園、伝統芸能まで、そして戦後の美術ではもの派やその流れを汲む世代まで、自然と人工物や人間の関係性、自然の抽象化、森羅万象を意識した空間構成などを振り返ることは、地球環境が激しく変化する現代において、未来への洞察を与えてくれるものでもあります。



栗林 隆 《沼地》2008 ミクスト・メディア 349×569×41.5cm
制作風景：十和田市現代美術館、2008年 Photo: Nakajima Kazumi

「ネイチャー・センス展」では、日本の自然観に改めて注目し、現代を生きる日本人の感性や文化的記憶と「自然」の関係性を、現代アートやデザインを通して考えます。展示では、国際的に活躍する日本のクリエイター吉岡徳仁、アーティストの篠田太郎、栗林隆の3名が参加し、新作インスタレーションを試みます。彼らはいずれも、自然現象や人間と自然の関係性をその表現に採用していますが、自然をある意味で抽象化する彼らの手法は、より感覚的に自然を捉えて来た日本の文化を彷彿させます。また、空間を大胆に使ったインスタレーションは、鑑賞者にとっても作品を体感として経験する機会となり、それが感覚的に自然を知覚してきた日本人の伝統的な感性を喚起します。この感覚をここでは「ネイチャー・センス」と題し、日本の自然知覚力を再考します。それはまた、美術における日本や東アジアの文化的固有性の再考にも繋がり、「日本を再定義する」ためのひとつの視点を提示してくれることでしょう。

主催：森美術館

企画：片岡真実（森美術館チーフ・キュレーター）

会場：森美術館 〒106-6150 東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 53階

開館時間：10:00 - 22:00 | 火 10:00 - 17:00 | (但し 11/2 (火) は 22:00 まで) *いずれも入館は閉館時間の30分前まで *会期中無休

入館料：一般 1,500円、学生(高校・大学生) 1,000円、子供(4歳-中学生) 500円

*表示料金は消費税込 *本展のチケットで「MAMプロジェクト012:トロマラマ」展、展望台 東京シティビューにも入館可(スカイデッキを除く)

*スカイデッキへは別途料金 300円がかかります(子供は無料)。

お問い合わせ：Tel: 03-5777-8600 (ハローダイヤル) WWW.MORI.ART.MUSEUM

掲載の画像を含む最新のプレス画像は、森美術館ウェブサイトにて申請いただけます。 WWW.MORI.ART.MUSEUM

PRESS RELEASE
プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報：渡邊、瀧、田村、岡崎 Tel: 03-6406-6111 Fax: 03-6406-9351 E-mail: pr@mori.art.museum
Website: www.mori.art.museum 〒106-6150 東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー

MORI ART MUSEUM

MORI ARTS CENTER

吉岡徳仁

1967年生まれ。倉俣史朗、三宅一生に師事後、吉岡徳仁デザイン事務所設立。紙の椅子「Honey-pop」や光そのものをデザインした照明「ToFU」など、数々の作品がニューヨーク近代美術館 (MoMA) を初めとする主要美術館で永久所蔵されている。デザインマイアミ/デザイナー・オブ・ザ・イヤー 2007 受賞。そのほか、NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」への出演や、『Newsweek』誌日本版では「世界が尊敬する日本人 100 人」に選ばれている。



吉岡徳仁《スノー》2010 (1997～)

吉岡徳仁は、人工素材を使いつつ、光、雪、嵐など自然現象を体感させるダイナミックな空間デザインで知られていますが、自然の原理やその働きを発想に取り込み、そこに自然科学の産物としてのテクノロジーを融合させることに未来のデザインの可能性を見えています。本展では、1997年にISSEY MIYAKEのウィンドウで発表した《スノー》を、さらにスケールアップさせ、巨大なインスタレーションとして展示します。それを見る者の体験は、大きな窓から吹雪を眺めるような、あるいは吹雪に向かって歩いていくような感覚を覚えます。また、『ウォーター・ブロック』(2002)、《雨に消える椅子》(2002～2003)などに続き、2005年から2006年にかけて制作された世界最大の光学ガラスのテーブル《ウォーター・フォール》も日本初の一般公開となります。このガラスは天体望遠鏡のレンズにも使われる大変透明度の高いもので、水のなかにガラス片を入れると、そのフォルムが消失していくように、椅子やテーブルといったフォルム全体が消失していくようなイメージで作られています。

篠田太郎

1964年生まれ。見事な手作業によるメカニク的な彫刻やインスタレーションで知られている。「庭」や「人間と自然の新しい関係」をテーマに、日常の風景から宇宙まで触手を広げ、独自の感性で時代を感受する。REDCAT (ロサンゼルス)、広島市現代美術館などでの個展、釜山ビエンナーレ (2006)、イスタンブール・ビエンナーレ (2007) など国際展多数。



篠田太郎《残響》2010 ヴィデオ (11分)

造園を学んだ篠田太郎は、「自然と人間の新しい関係」をテーマに、人間の体内から宇宙まで、いわば森羅万象を観察対象にしてきました。現代の都市風景や利便性、テクノロジーの発展した日常の環境と人との関係を考えることで、「私達の生活、社会、文化を含めて自然を完全に抽象化する」プロセスに関心があるといいます。

本展では、新作の映像トリロジー《残響》を発表。駐車場や廃棄物処理場などの都市風景と動物園にいるバクの関係や首都高速道路が上を走る江戸時代の水路を巡る映像を通して自然と人工空間の関係を考察します。また、昭和の作家・重森三玲による東福寺東庭に触発された新作では、ドーナツ型のプールに同時に広がる複数の波紋を通して天空を描きます。さらに、2006年の釜山ビエンナーレに出品した《忘却の模型》の最新バージョンも紹介します。

栗林 隆

1968年、長崎生まれ。1993年武蔵野美術大学、2002年クンストアカデミーデュッセルドルフ (ドイツ) 卒業。ケルン市立美術館 (2003)、シンガポール・エルメス・ギャラリー オーチャードロード (2006) 等で個展のほか、「Arts Towada」十和田市現代美術館：パーマナントコレクション、「Thermocline of Art - New Asian Waves」ZKM カールスルーエ・アート・アンド・メディア・センター (カールスルーエ/ドイツ)、「NEW NATURE」(ニュープリマス/ニュージーランド)、「GARDENS ガーデナーズ-小さな秘密の庭へ」豊田市美術館など国際展多数。



栗林 隆《ゼーフント・ヒロシマ (アザラシ・ヒロシマ)》
2004 ネオプレン、ミクスト・メディア
1462×1411×680cm
展示風景：「ミュージアム・アドベンチャーの活動から」
広島市現代美術館、2004

日本画を学んだ栗林隆は、二次元空間で境界としての線が二分する領域やレイヤーの多義性に向けられた関心を三次元の空間構成、インスタレーションへと発展させてきました。作品に頻出するアザラシやペンギンなどの動物は、水中と陸、野生と人間など二元論の境界線あるいは中間領域の象徴として使われ、観客はそれら動物の視点を共有するように性格や視点の異なる複数の空間を往来します。

本展でも、紙材を使った樹木から新たに植物が育つ森林や、2001年の《島々》から派生した新作として、ギャラリー内に土を高く持った山の頂上に描かれた世界地図など、見る物の視点の移動にともなってスケール感や観点の全く異なる空間体験が可能なおインスタレーションを構想しています。

掲載の画像を含む最新のプレス画像は、森美術館ウェブサイトにて申請いただけます。 WWW.MORI.ART.MUSEUM

PRESS RELEASE プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報：渡邊、瀧、田村、岡崎 Tel: 03-6406-6111 Fax: 03-6406-9351 E-mail: pr@mori.art.museum
Website: www.mori.art.museum 〒106-6150 東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー